



創業から振り返る
50年の歴史

50th
FUTABA
CHRONICLE
ふたばクロニクル

フィールドは、ふるさから世界まで。



Think Glocal
50th

50周年記念動画はこちら





代表取締役
遠藤 秀文

2021年11月、株式会社ふたばは創業50周年を迎えます。

東日本大震災で本社機能を失いながらも、1カ月後に郡山市で事業を再開。混乱の最中、魅力ある地域の創生のため、新たな歩を踏み出しました。以来一度も振り返る余裕もない中、数歩先を常に意識し従業員と共に励んでまいりました。

震災以降、福島県には課題が山積しております。なかでも故郷である双葉郡は日本・世界が将来経験する社会問題・課題をすでに有する地域なのかもしれません。だからこそ、多様な課題に真剣に向き合い、対応し続けることで将来日本や世界が必要とする技術・サービス・制度等をこの地域から誕生させることができると思っております。

測量から始まり、測量設計、建設コンサルタントへ進化。そして地域のさまざまな課題に対応できる「社会コンサルタント」を目指し邁進いたします。

「フィールドはふるさとから世界まで」をモットーに、地域に貢献し、世界に活動の場を広げていきたいと存じます。

福島県を国内外の「希望」にするために微力ながら尽力してまいります。引き続き皆様方のご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

未曾有の震災に見舞われながらも、
真摯に課題と向き合い歩みを進め
地域と世界から求められる企業へと
成長を遂げた株式会社ふたば

「はかる」

「つくる」

「つなぐ」

希望を胸に、
さらにその先へ



郡山支社(2021.8.23撮影)



富岡本社(2021.8.23撮影)

4代目：菅野精[2002.4~2008.5]		3代目：神保哲也[1997.8~2002.3]		2代目：遠藤利子[1988.3~1997.7]		初代：遠藤勝也[1971.11~1988.2]			代表者歴			
2009年4月 (独)国際協力機構(JICA)の コンサルタント登録	2007年8月 遠藤秀文 富岡町へ帰郷	2001年8月 ISO9001認証取得	2000年5月 建設コンサルタント登録	1997年7月 遠藤勝也 富岡町長就任	1994年10月 双葉測量設計株式会社に 組織変更	1994年3月 補償コンサルタント 登録	1984年4月 社団法人 福島県測量 設計業協会加入	1977年10月 法人化 (有)双葉測量 設計事務所	1976年4月 社団法人 日本測量協会 加入	1973年11月 測量業 登録	1971年11月 創業・営業開始	1971年9月 遠藤秀文 誕生
●裁判員制度による 初の裁判が始まる ●米大統領にオバマ氏就任 (民主党)ノーベル平和賞受賞	●新潟県中越沖地震が発生 ●サブプライム問題表面化、 世界的株安	●「家電リサイクル法」 スタート ●アメリカ同時多発 テロ事件	●イチローが野手として 日本人初の大リーガーとなる ●白川英樹名誉教授が ノーベル化学賞を受賞	●秋田新幹線・長野新幹線 開業 ●ダイアナ元英皇太子妃が 事故死	●オウム真理教による松本サリン事件 ●ネルソン・マンデラ、南アで黒人初の大統領に		●1万円(福澤諭吉)・5千円(新渡戸稲造)・ 千円(夏目漱石)の新札発行 ●ロサンゼルスオリンピック開催	●日本初の静止気象衛星 「ひまわり」打ち上げ ●イラン革命	●ロッキード事件 ●モントリオール五輪開催	●祝日法改正 (振替休日制の導入) ●石油ショックによる 物価急上昇	●NHK総合テレビが 全番組カラー化を実施 ●アポロ14号、月に着陸	

創業期 1971~2010年

はじめは、地域とともに

双葉測量設計、始動

ふたばの歴史は半世紀前の1971年11月から始まる。創業者である遠藤勝也が20代で両親を亡くしたことが最初のきっかけだった。東京農業大学を卒業後、福島県庁農地林務部(当時)に入庁した勝也は、家業である瓦業「遠藤セメント工業」を継ぐために28歳で県職員を辞し、双葉郡富岡町に帰郷。両親の遺した仕事をこなし、夫婦二人三脚で1人の娘と2人の息子(うち1人が現社長である遠藤秀文)を育てながら過ごしていた。

そんなある日、役場の職員から「公共事業を手伝って欲しい」との依頼を受ける。そこで、家業である瓦業を妻に託し、勝也は農業土木・測量設計関連の公共事業に携わることを決意する。

農業土木と測量設計

農業土木とは、農用地や農業施設の整備により労働の生産性と安全性を高めるための土木のことだ。農業用水路・排水路の整備や農道、ため池、農業集落排水の整備、そして農地・農業施設が災害に見舞われた時に復旧を行なうことも含まれる。農業土木には測量設計が必要となり、その技術が仕上がり

を引き継ぎ、建設コンサルタントの登録、ISO9001認証の取得など、様々な事業に順調に携わりながら信頼と実績を積み重ねていった。

不況の波

苦労を重ねながらも順調に売上を伸ばしてきた双葉測量設計だったが、2009年、第93代内閣総理大臣に就任した鳩山由紀夫氏による10月の所信表明演説において一変する。

鳩山内閣は、「コンクリートから人へ」の理念を示しつつ、「大規模な公共事業について、国民にとって本当に必要なものかどうかをもう一度見極めることからやり直す」とし、公共事業政策の方向転換を図ることを表明した。これに沿って、2009年度第一次補正予算による公共事業の執行を一部停止。予算が大幅に削減されたことで、公共事業1本で歩みを進めてきた双葉測量設計は苦境に立たされ、初めて赤字を記録する。非常に苦しく、底が見えず、来年が不安になるほどにまで追い詰められることとなった。

今まで黒字続きであったが、公共事業一辺倒では景気や政策に大きく左右されてしまうことをこの時強く実感。しかし、あと数年間はこの窮地から抜け出せない状況となるのだった。

遠藤秀文、ふるさとへ

双葉測量設計に不況の波が押し寄せる少し前、遠藤秀文が富岡町に帰郷した。

決定付ける大きな要因となる。

たった1人からのスタートだった。やることは沢山あった。営業から測量まで、すべての業務を1人でこなした。身を粉にして働く日々。苦勞が絶えなかった。それから2年後の1973年に測量業として登録。その3年後には社団法人日本測量協会への加入を果たし、いよいよ1977年に「有限会社双葉測量設計事務所」として法人化。現在のふたばの礎を築いた。

その頃には仲間も2人3人と増え、勝也1人ではなくなっていた。懇意にしていた数内測量からも応援に駆けつけてくれ、皆で協力し、大熊町役場のモデル事業や福島県の農林関係等の公共事業に専門的に携わった。徐々に設計の仕事も増えていく。過去の努力の成果も、様々な公共事業が行なわれ始めた時代の流れにも上手に乗ることができ、人脈も少しずつ広げることができた。

その後勝也は、住民の後押しにより富岡町議会議員選挙へと出馬するため1988年に会社を退き、遠藤利子が2代目代表に就任。1994年には補償コンサルタントの登録を済ませ、同年10月に有限会社双葉測量設計事務所から「双葉測量設計株式会社」へ組織を変更。その後も3代目となる神保哲也、次いで4代目・菅野精、5代目・深海昭二へとバトン

高校卒業と同時に福島を離れた秀文は、大学を卒業した後、都内の大手建設コンサルタント会社に13年間勤務する。数多くの政府開発援助(ODA)案件の開発調査を担当し、道路、港湾、海岸保全や災害対策など、インフラ整備に関するあらゆるプロジェクトを経験する。

国家単位で話を進めなければならない大規模なプロジェクトでは、多数の利害関係者が存在する。秀文は、その時々で複雑に絡み合っている利害関係と課題を細かく分析し、最適な解決策を示すプロジェクトにいくつも直面するうちに、課題の本質は何なのか、その課題の最適解は何なのかを見極められるようになっていく。13年の間に訪れた国は実に24カ国に上り、発展途上国をはじめとする約30カ国の支援に携わった。いろいろな国や立場の人と出会って交流を深め、多様な文化を体験し、知識を習得しながら、最初の会社員時代をほぼ海外で過ごした。

「35歳になったら帰郷して地域のために貢献しよう」―大学時代からそう決めていた。高校時代からの親友にも宣言していた。何故35歳だったのか。大きな意味はないが、様々な社会経験を積み、気力や体力が十分な年齢であること、帰郷して地域に馴染み行動できるようになるには時間が掛かるから、良いタイミングだったのかもしれない。そしてその宣言通り、2007年、35歳の時に富岡町へ帰郷。父が創業した双葉測量設計へ専務として入社し、13年間培ってきた経験を活かしながら地域貢献に積極的に励んでいく。

だが帰郷して3年余りが経過した頃、誰も予想し得ない、あの未曾有の出来事が起こるのである。



双葉測量設計外観(2009.7)



忘年会(2009.12)



遠藤勝也富岡町長選挙4期目当選(2009.7)



ISO取得 集合写真(2001.12)



社員旅行:台湾 集合写真(1992.4)



旧社屋2階増築(1980年初頭)



2011年12月

●富岡町役場郡山事務所移転(市内大槻町)
いわき、三春、大玉出張所開設

2011年7月

●富岡町合同慰霊祭

2011年6月
いわき事業所開設

●仮設住宅抽選会

2011年5月
相馬事業所開設

●自衛隊による町内の
捜索活動開始

2011年4月
震災後、郡山市に
本社機能を移し、再開

●富岡町役場郡山出張所開設
(ビッグバレットふくしま敷地内)
●福島第一原発から半径20km圏内を
立入り禁止の「警戒区域」に指定

2011年3月11日
東日本大震災

●マグニチュード9.0の大地震発生
●最大21.1mの津波被災(富岡町)
●福島第一原子力発電所事故 ●富岡町民が避難

変革期

2011～2013年

東日本大震災とふたば

2011年3月11日

皆がいつもの1日と変わりなく過ごしていた2011年3月11日。唐突にその時はやってきた。

14時46分、三陸沖を震源とする東北地方太平洋沖地震が発生。地震の規模を示すマグニチュードは国内観測史上最大となる9.0を記録し、双葉測量設計の社屋が建つ富岡町では震度6強を記録。立っていることも難しく、車は横転しそうになり、電柱は大きく左右に動くような激しい揺れだった。さらに富岡町には最大21.1メートルの津波が押し寄せ、多くの生命と財産を一瞬で飲み込んだ。またその津波により、福島第一原子力発電所で甚大な事故が発生する。炉心熔解等で放射性物質が漏れ出し、地震発生から丸1日が経過しようとしていた12日の15時頃、第一原発1号機建屋が水素爆発で吹き飛んだ。世界的にも類を見ない、大規模な原子力災害の幕開けとなったのである。

震災発生当日、大きな地震に加え、津波が直ぐそばまで襲ってきたにも関わらず、社員達は幸い全員無事だった。社屋は浸水は免れたものの、天井が崩れ、機材は落ち、棚は倒れ、すべてのものが床に投げ出された状態だった。とにかく片付けは明日へ回し、その日は解散。しかし3月12日、菅直人内閣総理大臣

構えた双葉測量設計は、震災発生の2年後となる2013年、6代目である佐藤貞雄から遠藤秀文へと引き継がれる。代表取締役役に就任した秀文は、義理を優先し、利益は後回しを意味する「先義後利」を社是の1つに据えた。それは、今後の心理的方針はもちろん、創業者であり人情家である父・勝也の仕事振りとその人柄に通じるものをどこかで感じたからかもしれない。

原発事故の脅威は未だ収まらず、富岡町には帰還できるか否か依然として分からないままであったが、今後故郷の復旧・復興に深く携わっていくことを考えると、現在展開する事業だけでは地域の問題解決に繋がらないだろうことは明らかだった。これからは、積極的且つ柔軟に新しいサービスを考え、事業展開していく必要があると強く感じた。そして、これまでのように公共事業のみから収入を得るままであれば、またいつ底なしの不況に見舞われるか分からないという不安もあった。

そこで、事業領域を限定せず、より広い分野で活躍する企業へと発展するべく、測量設計というワードを社名から外し、ニュートラルなイメージのものに変えることとした。

双葉測量設計からふたばへ

2013年、双葉測量設計株式会社は「株式会社ふたば」に社名を変更し、ロゴマークは以前からの特徴を活かしつつ、リ・デザインを行った。因みに、ふたばのロゴマークとマスコットキャラクターの『ふたば君』は、植物の葉と測量の三脚をベースに、

が発した「福島第一原子力発電所の半径20キロメートル圏内からの避難指示」を受け、富岡町役場と町民は川内村へと避難。さらに3月15日には、「半径20～30キロメートル圏内の住民に対する屋内退避の指示」が新たに発令されたため、川内村と共に郡山市のビッグバレットふくしまに退避することとなった。当時富岡町の町長を務めていた遠藤勝也も、大きな不安と混乱の最中、町民の先頭に立ち尽力し続けていた。もちろん社員も避難の例外ではない。予定通りに社屋の片付けに集まることも叶わず、方々へ移動を開始。着の身着のままに故郷を離れるという切羽詰まった状態だった。

社員全員が県内外に散らばり、先の見通しも立ってはいなかったが、故郷に会社を育ててもらった恩を返すため、そして何よりも大切な故郷を守るために、震災発生1ヶ月後の4月11日、被災したこの企業よりも早く事業をスタートさせることを決意。郡山市に仮本社を構え、10人となった社員達で再出発をきった。

父から子へ

2011年4月に郡山市の仮本社で事業を再開し、その1ヶ月後に相馬市、次いでいわき市に事務所を

緑色は山、青色は海をイメージしてデザインされている。

創業当時から経験・技術を積んできた測量設計を続けながら、同時並行で建設コンサルティングとしても飛躍していくふたば。震災復旧作業は待たなしのスピード勝負が多かったため、時に激務と化したがお客様の多種多様なニーズにしっかりと応えるため、日々頭を悩ませ、試行錯誤を繰り返し、時には新しい技術や機器、そして知識を取り入れながら皆が協力して歩みを進めた。それが、現在積極的に進んでいる環境コンサルティングや地域デザイン(まちづくり)、海外コンサルティングなどの新しいサービスをスタートさせることにも繋がっているのである。

ふたばと復旧事業

高い技術力と広い知識をフル活用し、ふたばは福島県沿岸地域を中心とした様々なインフラ・ライフラインの復旧・復興作業へと尽力を続けていく。例えば、被災状況の調査や、津波により甚大な被害を受けた漁港の測量設計などを実施。また、富岡町をはじめとする双葉郡内からの発注で、帰還困難区域となつてしまった箇所にある文化財や豊かな森林をデータとして保存し、震災遺構として後世に残すためのプロジェクトなどにも積極的に携わった。

復旧・復興作業を進める中で、今まで大切な時を過ごしてきた故郷の被害を次々と目の当たりにしていく秀文と社員達。地震の莫大なエネルギー、そしてすべてのものを一瞬で押し流す津波。その威力にあらためて驚かされることとなった。



郡山仮本社での打合せの様子(2016.6)



郡山仮本社にて集合写真(2016.1)



避難所の町民を見巡る勝也町長(2011.4.29)



富岡町災害対策本部(2011.3.11)



津波被害にあった社長宅(2011.3.11)



家族でバーベキュー(2010.夏)

創生期

2013~2021年

2021年3月 ふたば交流センター 『整の箱』開所	2020年10月 地域未来牽引企業(経済産業省) 選定	2019年12月 第36回 福島県建築文化賞 <優秀賞> 受賞	2019年12月 第5回 ふくしま産業賞 <知事賞> 受賞	2019年5月 第39回 東北建築賞 <特別賞> 受賞	2017年8月 富岡本社・郡山支社の 新築移転	2017年8月 いわき事業所・ 相馬事業所を閉所	2015年3月 がんばる中小企業300社受賞 (経済産業省中小企業庁)	2014年7月 遠藤勝也 死去	2013年12月 株式会社ふたばに社名変更、 田村営業所開設
●東京オリンピック開幕 ●米、アフガン戦争終結	●新型コロナウイルスによる感染症が流行 ●東京五輪の1年程度延期 IOCパッハ会長が声明	●新元号は「令和」 出典は万葉集 官房長官発表 ●訪日外国人旅行者3000万人超			●原発事故 避難めぐる集団訴訟 で初めての判決 ●米大統領にトランプ大統領就任 (共和党)		●北陸新幹線 長野~金沢間開業 ●ノーベル医学・生理学賞を北里大特別 栄誉教授の大村智氏が受賞		●新しい大津波警報や津波警報 運用開始 ●IOC総会で2020年五輪・パラの 開催都市が東京に決定

地域の復興、そして創生へ

海外へ展開

震災後、ふたばは様々な災害復旧や復興計画づくりなど、建設コンサルタントとしての業務を行ってきた。そして、震災遺構や文化財保全のための調査により培った国内有数の技術と経験を海外にも役立てるというコンセプトを立てる。海面上昇が課題のツバルをはじめ、インドネシアやモリリヤス、フィリピンなどの島しょ国で国際協力機構(JICA)が行なう海岸保全事業に積極的に参加。海岸侵食、高潮、津波被害やサンゴ再生計画を立案し、日本の国際貢献事業の力となった。

2020年には、〝空大都市〟とも呼ばれる南米ペルーの世界遺産・マチュピチュ遺跡の保全調査が採択。傾斜が急なマチュピチュでは、土砂崩れなどで貴重な遺跡が失われる懸念が常にある。しかし、精密に計測された3次元データがあれば、観光利用の他、文化財の保全や土砂災害など周辺地域の防災へも活用できるのではないかと考えた上での調査内容となった。

マチュピチュ遺跡の3次元データは福島県大玉村への提供を予定している。これについては、創業者である遠藤勝也の思いも関係している。大玉村は震災時、富岡町などからの避難者を公共施設などで快く受け

また、原発被災地域では様々な課題が山積していることから、建設分野による復旧・復興に加え、UAVレーザーやICT技術を応用し、森林、農業、環境、放射線、獣害対策などの分野にも実証事業等で関わっている。2017年度、福島・国際研究産業都市(イノベーション・コースト)構想の重点分野で技術開発に取り組み企業を支援する県の地域復興実用化開発等促進事業費補助金に採択され、以降、大学など多くの研究機関と協働し、技術研究を行なっている。

2017年8月、富岡町に本社社屋、郡山市に支社社屋を建設し、約6年半ぶりに本社機能を郡山市から富岡町に移転。遂に念願の、故郷への帰還を果たす。秀文の先祖が遺してくれた富岡町内の山の良質な木材をふんだんに使用した温もり溢れる両社屋は、故・芳賀沼整(はがぬませい)さんによる設計で、東北建築賞(特別賞)と福島県建築文化賞(優秀賞)を受賞。また、2021年3月には南相馬の仮設団地集会所を富岡本社のすぐそばに移築。『ふたば交流センター 整の箱』という名称は、設計者である芳賀沼さんの名にちなみ付けられた。

多様な人材が集結

様々な挑戦や新しい技術を取り入れていくことにより、ふたばには多様な人材が少しずつ集結してくるようになった。新入社員も、以前は土木系出身の者が多かったのに対し、今は建築系学科や情報系学科、そして文系学科出身の者も入社している。

新しい技術や機器は若手社員が中心となり運用。

入れ、避難者同士や村民との交流事業も積極的に催してくれた。当時町長だった勝也は、生前ことあるごとに大玉村への思い入れを話していた。秀文はある時、大玉村とマチュピチュ村が友好都市協定を締結していることを知り、3次元測量技術による恩返しを思い付く。様々な機関と協議・調整し、遂に事業提案が採択されたのである。

フィールドはふるさとから世界まで〝を2021年現在モットーに掲げているふたば。これからも積極的に世界へと展開していく予定だ。

新技術の導入と富岡への帰還

ふたばは、災害復旧・復興のハード的な対応だけではなく、原発被災地における特殊な対応も行なっている。例えば、帰還困難区域内での中間貯蔵施設の建設に関わる調査。また、長期の避難により既存の学校や施設・集落などは解体せざるを得ない状況にある。そこで、被災地域の被害状況や復興状況の後世に残し、災害伝承や防災教育として活用するため、UAVレーザー等を用いて精密な3次元データを取り、保存している。これは、2021年7月にオープンした富岡町震災伝承施設・とみおかアーカイブ・ミュージアムなどで活用されている。

その他にも、個人個人の知識欲や積極性が増し、技術力もぐんぐん伸びている。

それぞれ異なる能力を持った人材が集まれば、お互いに刺激を与えることができ、会社はより挑戦の幅を広げ、大きく成長することができるのだ。

『社会コンサルタント』を目指して

秀文は現在、農業者や会社経営者などの町内有志5人で設立した「一般社団法人とみおかワインドメース」の代表も務めており、会社経営とは異なるアプローチからまちづくりやコミュニティづくりに奔走している。被災した土地を活用しスタートしたぶどう畑には、毎年苗木が増え、現在は約3,000本。2020年には初めて試験醸造を行なうことができた。こうした地道ながらもポジティブな活動は、地域づくりの1つの核となり、周囲に良い影響を与えている。

遠藤勝也がたった1人から立ち上げたふたば。半世紀という年月をかけ、測量業から測量設計、建設コンサルタント、そして次は、人や地域の思いをつなぎ、課題解決に貢献する『社会コンサルタント』を目指す。

あの未曾有の複合災害を経験したこの地だからこそ成し遂げられる技術開発がある。長く培ってきた技術、経験、知識、そして柔軟な発想力をより磨きながら、これからも、地域、そして世界に貢献していく――。

多くの希望と笑顔輝く未来のために。

ふたばの挑戦に、決して終わりはない。



令和3年度入社式 集合写真(2021.4)



ふたば交流センター「整の箱」(2021.3)



マチュピチュ調査(2020.3)



ふくしま産業賞知事賞受賞(2020.2)



本社落成式(2017.8)

50周年特別座談会

過去から今、そして未来へ

ふたば代表である遠藤社長をはじめ、ふたばと共に人生を歩んできたベテランから入社一年目のフレッシュな社員まで。想い出話や将来の希望などを語り合ったスペシャル座談会です。

50年という節目を迎え 今各々が思うこと

司会：創業50周年おめでとうございます。今のお気持ちはいかがですか？

遠藤：長い歴史を刻んできたなど。父が大変な時期に1人で立ち上げたので、それを引き継ぐことに責任を感じていますね。次は100年という目標を掲げ、新たな気持ちで取り組みたいと思います。

三浦：貴重な節目に居ることができたと嬉しく思います。運命を感じますね。

四條：入社45年、一緒に人生を歩んできた感じです。会長（創業者）を私は「親父」と呼んでいましたが、親父には人生を教えられ、社会人としても育ててもらいました。年齢的に考えるともう少しで会社からお別れなんですけど（笑）。今後も貢献できればと思います。



西山：苦勞してきた分、仕事に対していいかげんなことをしない人でした。我々社員は大きな愛情で育ててもらいました。酒の席では冗談も言い合ったりして。ゴルフに行ったり、個人的には仲人をやってもらったりしました。

四條：僕は親父のことは前から知っていましたが、元は筋骨隆々で頭フサフサで。再会には東京での宴会。知らないおじさんがシャツにステテコ一丁、頭ツツルテンでうちわを仰いで僕を呼ぶんですけれど誰か分からないんですよ。そしたら「勝也だよ！」って言われて「え！？」って。その時「学校卒業したら俺のところ来いや」と言われて、行く気はないけどハイハイ答えた。そんな感じで入社してから全然やる気がないの（笑）。でもそれを知っているのに文句を言わなかった。何年か経って僕も一生懸命やるようになったんですが、ずっと見てくれていたんです。バツと怒っていい時と気長に待たなきゃならない時を見分けて指導してくれる、すごい親父でした。



西山：あと、子供に優しくしたいけど出来ない、そういうところ不器用で。家庭と仕事とでギャップがあったんじゃないかな。そういや昔息子（現社長）が野球の大会に出られなくなったのがっかりしたな。本当は応援に行きたかったと思うよ。

西山：私も30年以上経ちましたが、いろいろなことがありましたね。

中出：入社した年に節目を迎えられたのは嬉しいです。会社と一緒に今後も成長していきたいです。

穂積：節目はもちろん、こうして今皆さんと一緒に仕事できていることは素敵な縁だなと思っています。

創業者である 遠藤勝也を偲んで

司会：創業者はどんな方でしたか？

遠藤：私の父でもあります。とにかくおっかなくて（笑）。小さい頃は殆ど喋らなかつた。お酒を呑むようになってから何でも話す関係になりました。そして亡くなった後、偉大さを知った。無形の財産である人脈も引き継がせてもらって感謝しています。

司会：お父様が亡くなられる1年前に遠藤社長が就任されていますよね。会長に復帰されたとのことでしたが。

遠藤：父が2013年の8月まで町長を務めていて、退任後会社に戻りました。

遠藤：中学最後の夏の大会ね。絶対調で、翌日もスタメンだって言われて有頂天になって、盗塁した時に骨折したんだよね。学校行事は1回も来てないけれど、「応気にしていることは人伝に聞いてたな（笑）。

西山：あの頃はお互い正面からぶつかって仕事してた感じね。酒の席で喧嘩して「俺やめる！」「やめこまえ！」「みたいな。今だったら考えられない、社長とそんなこと言い合うの（笑）。

三浦：私はお葬式の時話を聞きましたね。復興を牽引して、人徳があった人。大勢の参列者が集まりました。震災避難は町長として全員を動かさなきゃならないから重い判断じゃないですか。その時も逃げずに決断して行動する。その精神は引き継ぎたいです。



「とにかく前へ」 大震災の中の決意

司会：震災当時の状況についてお伺いしたいです。

遠藤：社員が誰も怪我しなかったのは不幸中の幸いでした。社屋は駄目だったけれど。地震直後、直感的に津波が来ると思った。高台に上がったほうがいいと

でも亡くなるまで1年もないんですよ。私が社長就任した頃から入院を繰り返していましたので、実質3ヶ月しか会社に来ませんでした。

皆に伝えて、その後自宅へ行き妻と子供を車に乗せて避難して、数分後に津波が来た感じ。

遠藤：富岡から全員避難したけれど、その後再開日を決めて富岡に戻り機材を選び出しました。でも原発事故直後で放射線量は高かった。あの頃はまだ自己責任で入れる状態だったんです。帰りに田村市で洗車してなんとか郡山に戻ってきました。西山さんはその時居たよね？

西山：うん。取り敢えず合羽を着て富岡に入ったよ。

混乱の最中も、育ててもらった ふるさとへの恩を貫いて

西山：震災当日私は外出していて、その途中で3回大きな揺れが来た。一緒にいた同業者の人に「海岸線は行かずに山手側を通ったほうがいい」と言われたけれど、地割れで通れないところがありましたね。次の日皆で会社を片付ける予定でしたが原発事故が起きた。最初は1、2週間で戻れると思ってたけれど段々無理だと分かってきました。そんな中「4月11日に事業を再開する」と連絡が来たんです。

遠藤：原発被災した事業者の中では相当早かったと思いますよ、再開日。これ実は父が関わっているんです。

川内村に災害対策本部ができたのを知っていましたが、町長である父の携帯に繋がらない。その時の唯一の手段は対策本部の衛星電話だったんです。何度も電話して



座談会参加者



遠藤 秀文

えんどう しゅうぶん

2007年入社
代表取締役



四條 眞樹

しじょう まさき

1977年入社
地域デザイン部次長



西山 卓之

にしやま たかゆき

1984年入社
営業部長



三浦 洵

みうら まこと

2014年入社
地域デザイン部設計課
課長補佐



穂積 香奈

ほづみ かな

2018年入社
事業推進部技師



中出 彩香

なかで あやか

2021年入社
地域デザイン部
設計課技師

若い力が増え加速するふたば 新しい分野への挑戦

方々をすごく好きになって、この土地で就職したいなと考えるようになりました。まちづくりや設計、図面が好きなので、関われる仕事がいいと思ってインターネットで検索したら丁度ふたばがヒットしてくれて(笑)。会社説明会で社長のお話を聞いて、街の人と接しながら仕事をする環境はいいなと思いました。

司会…実際に入社していかがでしょう？

中出…面接の時にまちづくりをしたいというのを伝えましたが、直ぐにはその業務は出来ないだろうなと思っていました。でも入社後はまちづくりチームに入っていたので、今は社長のぶどう作りに参加しています。地域の人々と触れ合う機会が多くて楽しいです。

穂積…アットホームで和気あいあいと仕事してたりとか、お互いに相談しやすい雰囲気があるのかなと思います。上司とペアで仕事することが多いんですが、気後れせずに相談できるので仕事しやすい環境だと感じています。

司会…今後ふたばで経験したいことを是非伺いたいです。

三浦…大学で建築を専攻していたので、将来的には自分のバックグラウンドである建築と、土木とを融合したプロジェクトに関わるものが出来たらと思います。



中出…今は穂積さんに資料作りを教わっています。アドバイスをもらい直していくのですが、自分が最初に作ったものと全然違うので「すごいな」と。日々勉強になります。

きっかけに行政と意見交換会を開催することになり、弊社がその運営を支援することになりました。当初は新人の私でも出来る内容ということで担当になりましたが、資料を作ることで、でも実はそれまできちんとした資料を作ったことがなかったんです。出来たものを発注者に見せた時、「これはどんな目的で誰を対象に作ってるの」と怒られたのが印象に残っています。今その経験が活かしていますね。今後はコンサルタントとして、地域の課題や町民の皆さんの意見を踏まえ、提案書や企画書を作成し、それを行政に提案して仕事に繋がるよう挑戦していきたいです。



大学ではサービスの提供とニーズについての研究をしていたので、今後ふたばで役立てたいと思います。

遠藤…皆さん素直な心を持っていてますね。元々の良いところを大切に育ててあげたい。あとは海外。

スケールも違うし、日本と違う文化に触れることで感じ方も違ってくるので、希望する人にはチャンスを与えたいです。色々な人と出会い、行動して、それを積み重ねていけば、もっと魅力ある人に成長できると思うんです。

分野を限定せず、出来る範囲を広げるチャンスであること。社名を「双葉測量設計」から「ふたば」にしたのは、地域を大事にしながら大きく飛躍するという思いも込められています。時代の変化に順応できるチャレンジ精神のある人に育って欲しいと思います。



写真提供: 富岡町

西山さんはビッグパレットの避難所から通勤してたよね。お昼ご飯は配給(笑)。根本さんと西山さんが居たんですって？

西山…そう。震災直後は息子がホテルを用意し

司会…共同生活をされたんですか？
遠藤…皆、方々に家族を残して郡山に集まったから。でも、玄関に入った瞬間にちょっと後悔。いろいろ放置された状態で酷かったの(笑)。でも部屋が多いから何とか皆で片付けて、雑魚寝して。

遠藤…うん。でも事業が上手くいくか分からないから、アメ商(リサイクルショップ)に行つて安い机と椅子を選んできたんですよ。並べてみると幅も高さも違うしガタガタ、椅子も傾いていて腰が痛い(笑)。全部で10万円しなかったな。とにかく節約して再スタートしました。で、その時は社員も郡山に住むところがないから、一軒家を借りたんですね。

司会…再開予定日ギリギリですね。
遠藤…うん。でも事業が上手くいくか分からないから、アメ商(リサイクルショップ)に行つて安い机と椅子を選んできたんですよ。並べてみると幅も高さも違うしガタガタ、椅子も傾いていて腰が痛い(笑)。全部で10万円しなかったな。とにかく節約して再スタートしました。で、その時は社員も郡山に住むところがないから、一軒家を借りたんですね。



写真提供: 富岡町

てくれたんだけど、実父が「長期間になるからホテルにいるのも」って言って移動した。ビッグパレットには富岡町役場が避難してたから勝也町長がいて、「俺、着の身着のまま避難したから下着とか靴買ってきたー！」って言われた記憶があります(笑)。特に町長は本当に大変だったよね。

遠藤…富岡町学びの森と川内村役場の2つの鍵を開けたと言っていましたね。全員避難所から出たことを確認して、「最後に脱出するのは船長の役割だ」って。

司会…大変な時を経験されましたね。

遠藤…数えきれない苦勞の連続。でも進むしかなかった。4月11日に業務を再開して、その後2ヶ所に拠点を構えましたが、場所の確保が大変でした。浜の方は避難者が多くて場所が抑えられていたから無いの。でも相双で育った会社だからそこに拠点を構えたかった。それに毎日郡山から行くのは大変で、最初の1ヶ月で無理を感じて不動産屋巡り。その後、以前社長を務めていた菅野さんの知人に物件を紹介してもらえて、5月に相馬事務所をスタートしました。6月には津波

素直に向き合うことで 個人も会社も飛躍する

遠藤…福島県の中小企業で毎年新入社員を採用するところは少ないです。でも私は毎年採用したいんですよ。生え抜きの層が出来るとチャレンジの幅は広がるし、将来の財産になります。だから合同説明会も私は必ず参加します。経営は人の確保が大事ですからね。

調査の依頼が来たので、いわきに拠点を構えなくちゃということでもた物件を探したら、懇意にしていた「ネモト宝石」の会長に父が相談してくれたんです。でもまた住むところがない。その日その日で宿を取って点々としましたね。3ヶ月間はいつ寝たか分からない状況でした。

無事拠点が出来たけれど、社員10人程で3拠点笑すこいでしょ。避難で辞めたり、復旧対応で体調を崩したりで、当時は人の確保も大変でした。でもその後いろんな方々が手伝いに来てくれて、少しずつ人が増えていったんです。

一方で、役場からは震災遺構としてデータを残したいというオーダーがあつて、対応するために3次元技術を採用したんです。結果的に今の機材や技術、新しいサービスの大部分はニーズにどう対応するかを一生懸命考えた結果ですね。

最初から出来ないと言わない。やれない理由じゃなくやれる理由を考える。その姿勢が今のふたばを創っています。ただ、新しいことを急激に増やしたので、社内の意思疎通が難しくなりました。でもこのままでは確実に10年後は厳しくなるから、チャレンジは必要でした。あとは、伝統ある経験技術を同時並行で進めること。スピード勝負で時間をかけられなかったもので、社員が去っていく時は本当に辛かった。でも我慢して次へ切り替える10年間でした。

司会…皆さんの入社のきっかけは何だったのですか？



03.09.2016

中出…私は大学の時に富岡のまちづくり会社にインターンで来ていて、関わった

穂積…私も研究室の先生の紹介です。震災当時は中学3年でしたが、復興に関わる仕事がしたいと漠然と考えていて。就職活動でふたばの説明会に伺った時に共感する部分が多くあり、「今出来ることは少ないけれど勉強して役に立ちたい」と思ったのが決め手です。

三浦…紹介ですね。学生時代にインドに留学していて、戻ってきて先生に「あと4ヶ月で卒業なので就職したいんですけど」って(笑)。その時ふたばはビッグパレットの近くに事務所を構えていたので、そこに挨拶に行つたのが最初です。でもよくよく振り返ってみると、留学前木造仮設住宅の見学に行つた際、ふたばの人が同じテーブルに座っていたんです。で、いざ挨拶に行つた時「ああ、あの時の」と。何か縁を感じました。



そして、 次の50年へ

時代に柔軟に寄り添いながら
皆で共に、ふたばの未来を
築いていきます。

編集後記

創立50周年の節目の年を迎え、記念誌を発刊できましたことを嬉しく思います。
創立者の遠藤勝也が故郷富岡町に測量設計会社を起業してから半世紀、弊社は
地元双葉地域や浜通り地方を中心にインフラの整備に関わってまいりました。

この間、様々な出来事がありましたが、大きな変化をもたらしたのは、原発事故を
伴う東日本大震災です。全町避難を余儀なくされた中、弊社も一旦は富岡町を離れたも
の、多くの方々のご支援により4年前に帰還することができました。

年月の経過に加え、震災・原発事故に伴う避難により、創業期等を知る社員が少なく
なっていました。このため、社史の確認や資料収集に苦労しましたが、どうか
発刊に至ることができました。

最後に記念誌の編集にあたり、寄稿や取材に対応していただいた皆様、作成に
ご尽力いただいた関係の皆様に対し、心より感謝申し上げます。

今後とも宜しくお願い申し上げます。

50周年記念誌制作チーム一同

株式会社ふたば
https://www.futasoku.co.jp



富岡本社

〒979-1111 福島県双葉郡富岡町大字小浜字中央592番地
TEL:0240-22-0261 FAX:0240-22-0368

郡山支社

〒963-0107 福島県郡山市安積3丁目157番地2
TEL:024-954-3832 FAX:024-954-3835

田村営業所

〒963-4312 福島県田村市船引町船引字臂曲11番地
TEL:0247-61-5366

開発研究事例紹介

地域のために、そして世界のために。その
土地の課題解決や国内外の未来を見据え
今後必要となるであろう様々な技術開発
研究を手掛けているふたば。その中から8つ
の事例を抜粋してご紹介します。

2016年11月

日本サンゴ礁学会

- マダガスカル国トアマシナにおける
サンゴの現状とサンゴ礁環境緩和策

2018年7月

学会誌投稿

- 日本リモートセンシング学会
日本リモートセンシング学会誌2018年38巻3号
- 東日本大震災からの復旧復興に
おけるUAV利活用の取り組み

2018年11月

学会発表

- 日本リモートセンシング学会
第65回学術講演会
- 土地被覆分類解析のための
RedEdge-Mの精度検証
- シカ個体抽出を目的とした
機械学習のための超解像処理を適用
したドローン熱画像の有用性評価

2019年3月

平成30年度土木学会東北支部
技術研究発表会

- UAVを利用した裸地小流域における
地表面温度の連続観測

2019年11月

日本リモートセンシング学会
第67回学術講演会

- 土地被覆分類を考慮した
UAVセンシングによる
空間線量マッピングの高精度化
- ライトセンサ調査と比較した
広域湿原におけるシカ個体数推定の
ためのドローン熱画像の有用性評価

2019年9月

論文

- 土木学会論文集G(環境)
- 裸地小流域を対象としたUAVによる
知表面温度の連続観測と
放射量・土壌水分量比較

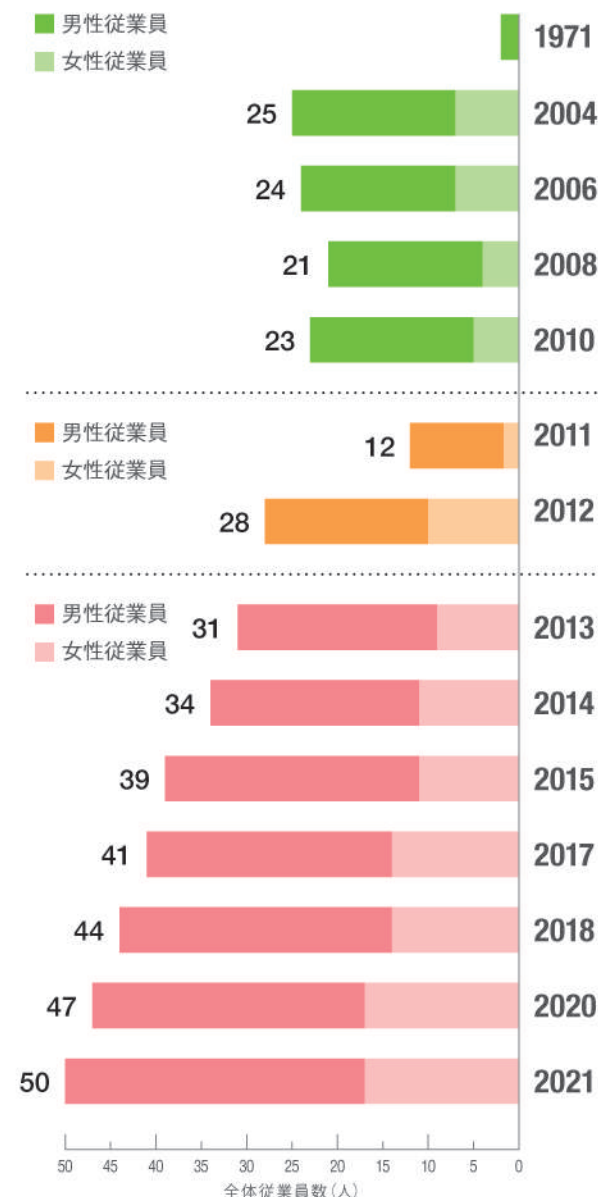
※[ふたば]はセカンドネーム

従業員数と拠点の変遷

創業から半世紀という長い年月をかけて成長してきたふたば。

不況や東日本大震災という試練を与えられながらも果敢に拠点やサービスを増やし、より良い明日を信じて邁進中。

多彩な人材が集結し、男女共にベテランはもちろん若年層が大いに活躍しています。



創業期

1971年
富岡町にて双葉測量創業

遠藤勝也が1人からスタート。その後仲間を増やしなが
農業土木をはじめとする公共事業に携わりました。

1971年 11月 創業・営業開始

1977年 10月 社名を(有)双葉測量設計事務所
にし、法人化

変革期

2011年3月 東日本大震災発生
郡山市に本社機能を移し、営業を再開

社屋損壊や原発事故による避難のため本社移転。
その後沿岸部復旧作業のため浜の方へ拠点を構えました。

2011年 4月 郡山市に本社機能を移し再開

2011年 5月 相馬事業所開設

2011年 6月 いわき事業所開設

創生期

2013年 株式会社ふたばに社名を変更
富岡本社、郡山支社を新築し移転

事業領域の限定を無くし範囲を広げるため社名とロゴマークを変更。
2つの新社屋は建築賞を受賞しています。

2013年 12月 株式会社ふたばに社名変更、田村営業所開設

2017年 8月 いわき事業所・相馬事業所を閉所

2017年 8月 富岡本社の新築再稼働、
郡山支社の新築移転

そして海外へ。

世界7カ国で様々な事業・調査を実施

海外でのODAプロジェクトに深く携わり、
島しょ国の海岸・サンゴ礁保全や世界的に有名な
マチュ・ピチュ遺跡に関わる調査を実施しています。

- 海岸保全計画
- サンゴ生態調査
- 港湾漁港計画設計
- 海岸防災計画
- 海岸管理計画
- 深淺測量(2D,3D)
- 施工管理
- GIS構築
- 遺跡文化財調査

